

読むと恋したくなる

カレンダー！

ラブ・ストーリー

Calendar Love Story

星海社 編

☆ 星海社



星海社文庫

読むと恋したくなる

カレンダー・ラブ・ストーリー

星海社 編



星海社文庫 セ1-01

よ読むと恋したくなる

カレンダー・ラブ・ストーリー

2014年7月10日 第1刷発行

定価はカバーに表示してあります

編者———^{せい かい しゃ へんしゅう ぶ}星海社編集部

©seikaisha 2014 Printed in Japan

著者———^{さ とう ゆう や はせくら い すな いぬむら こ ろく こうぎょく}ミタヒツヒト・佐藤友哉・支倉凍砂・犬村小六・紅玉いづき

©Hitsuhito Mita/Yuya Sato/Isuna Hasekura/Koroku Inumura
/Iduki Kougyoku 2014 Printed in Japan

発行者———^{すぎ はら みき の すけ おお た かつ し}杉原幹之助・太田克史

編集担当———^{ひらばやし も え ぎ}平林緑萌

編集副担当———^{はやし ゆ み こ}林佑実子

発行所———株式会社星海社

〒112-0013 東京都文京区音羽1-17-14 音羽YKビル4F
TEL 03(6902)1730 FAX 03(6902)1731
<http://www.seikaisha.co.jp/>

発売元———株式会社講談社

〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21
販売部 03(5395)5817 業務部 03(5395)3615

印刷所———凸版印刷株式会社

製本所———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記の上、講談社業務部あてにお送りください。送料負担にてお取り替え致します。

なお、この本についてのお問い合わせは、星海社あてにお願い致します。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-138972-4

Printed in Japan

カレンダー・ラブ・ストーリー

目次

ホワイトデー
3月14日

森川空のルール 番外編

ミタヒツヒト

7



いい夫婦の日
11月22日

青春離婚

紅玉いづき

179

十五夜
9月13日

月のかわいい一側面

犬村小六

125

くじの日
9月2日

キタイのアタイ

支倉凍砂

105

七夕
7月7日

星の海にむけての夜想曲

佐藤友哉

61

Calendar love story



星海社文庫

読むと恋したくなる

カレンダー・ラブ・ストーリー

星海社 編

カレンダー・ラブ・ストーリー

目次

ホワイトデー
3月14日

森川空のルール 番外編

ミタヒツヒト

7



いい夫婦の日
11月22日

青春離婚

紅玉いづき

179

十五夜
9月13日

月のかわいい一側面

犬村小六

125

くじの日
9月2日

キタイのアタイ

支倉凍砂

105

七夕
7月7日

星の海にむけての夜想曲

佐藤友哉

61

Calendar love story

Calendar love story

森川空のルール 番外編
ミタヒツヒト

3/14



無人の中央階段は、静寂に包まれていた。

誰もおらず、何も動かない、時間の止まった空間。

でも、あるときとは、大切な何かが、決定的に違うのだ。

同じ静寂でも、死を思わせるような冷たさを帯びた、いつかの日のものとは。

そう、それはどこか、彼女にもよく似た――

「これ以上は、よくない」

そこまで考えて、僕はむりやりに思考をねじ切った。

きょうは、三月十四日。いわゆる、ホワイトデー。

あの日から、ほぼ、一カ月。

不器用な彼女が、僕に与えてくれた、ささやかで、いびつで、そして、とても暖かな、

精一杯の気持ち。

今度は、僕が応える日に、できるはずだったのだけれど。

彼女はいない。少なくとも、僕の手の届く範囲には。

「時間……」

携帯電話を開いて、時間を確認する。午後一時五十九分。約束の時間の一分前。少し、急いだ方がいいだろうか。もう少し速く歩けばよかった。

頭の中はまるで別のことを考えていたとしても、僕の体は、何事もなかったかのように、日常を処理していく。可もなく不可もなく、ある意味、ストレスは少ない。

しかし、だからこそ代わりに積もりゆく悲しみも、そこにはある、と思う。

各階の踊り場に作りつけられた小さな採光窓が、まだ春になりきらない、あいまいな光と熱をリノリウムの床に投げかける。

春休みを目前にした休日の校内は空^{から}っぽで、次の瞬間には消えてしまいそうな^{はかな}儚さをたたえている。

部活動に参加すらしていない僕が、なぜこうして休日に登校しているのか。もちろん、れっきとした理由がそこにはあった。

年が明けてからというものの、三年生への進級を目前にして、あまり意欲的とは言えないクラスメイトたちの揃う僕の教室でも、喧騒^{けんそう}の中に「進路」という単語が混じるようになっていた。

数日前、帰りのホームルームでのことだった。期末試験も終わり、来年の受験戦争に向

けての心意気を熱く語る担任の国語教師のことばをいつものごとく聞き流しながら、小声で語らう男子のグループの中には、当然ながら、僕もいた。

話題の中心は、春休みは何をしようか、という至極ありふれたもので、もう予備校へ書類を出した、とか、まだ部活の大会が残っているのもその練習、と言うものもいたが、その多くは「とりあえずどこかで遊ぶ」という、楽観的で自然な結論に到達しているようだった。

僕も、一緒に行かないか、と声をかけられたが、断った。

申し訳ないんだけど、アルバイトがあるから、と。

それは半分本当で、半分はウソだった。

僕のアルバイト先は、「彼女」の叔父が経営する喫茶店だ。記憶によれば、友人が提示した日程には、昼からのシフトが入っていた。

とはいえ、ほとんど趣味でやっているような店だ。客足もほぼないに等しい。むしろ僕が彼の話し相手として雇われているという格好が正しいかもしれないくらいだ。

だから、なんとか融通をつけることも可能だろう、とは思う。

気が乗らない。身も蓋もない言い方をすれば、そういうことになる。

僕の頭の中のほとんどはホワイトデーのことで占められていて、「いつかまた」の「いつか」がホワイトデーでないことを呪う気持ちと、それが当然だと制そうとする理性がせめ

ぎあって、混沌^{こんとん}を極めていたわけである。

少なくとも、じっとしているべきではない。

しかし、友人と遊びにいく気にも、当然ながら、なれない。

そんなとき、担任が口にしたことばが、ふと、耳に入った。

こんどの休日、図書館の整理をするから、暇^{ひま}な生徒は手伝いに行ってくれないか。

三年生の卒業と同時期に図書委員も解体され、この時期はほぼ機能していないため、管理は司書^{ししょ}さん一人で行わなければならないから、というのが理由らしい。

そうだ、悪くないかもしれない。

友達と遊ぶほどのエネルギーを使うこともなく、家でじっとしているよりも、きっと負担は少ない。行ってみるのも、きっと悪くない。

好都合なことに、事前に連絡は必要ないらしい。来られる者は来い、という話だった。他に誰かが来るとは思えない。おそらく、司書さん、もしくは担任、そうでなければその両方と、無難な会話をしながら一日を過ごせばいい。すべてが終わるころには、ホワイトデーの罪悪感^{しゅあくかん}は僕の頭上を素通りしてくれているはずだった。

三階まで、階段を上った。そう、三階までだ。それ以上、ましてや屋上へと続く、「あの

空間」へ踏み込む必要はない。

薄暗い階段に目が慣れれば、窓から差し込む明かりはむしろ眩しい。暑苦しいとすら感じてしまう。

でも、もし、いま、この階段の上のあの場所まで登っていったなら、そこにはまだ、あの、冷たくて薄暗くて、そして暖かい、あの空気が残っているような気がした。

少し、行ってみるか。誘惑は、輪郭のぼやけた甘みを持っていた。刺すように寒い冬の日の朝、必死の思いで布団から抜け出して、ふと振り返った瞬間のそれと、よく似ている、と思った。

だめだ。何のためにここに來たのか思い出せ。

空っぽの校舎が、こんなにも思い出を刺激してくるとは、思いもしなかった。

足早に、三階の廊下を進む。上履きがぱたぱたと鳴った。

緑色の、分厚い扉が目に入る。

図書室の扉は、防犯のためか、それとも遮音性を考慮したものなのかはわからないが、緑色に塗られた、分厚い金属のそれだった。「図書室」というプレートが掛かっていることを除けば、どちらかと言えば放送室に近い印象を受ける。

どこの学校もこんな分厚い扉を用意しているのだろうか？ と、とりとめのないことを考えながら、レバーハンドルに手をかけて、軽く押し下げると、金属音と共に、扉のロッ